

愛犬と入院OK

患者のストレス軽減

松波総合病院（羽島郡笠松町）を運営する社会医療法人蘇西厚生会は4月、飼い犬と一緒に入院できる病室「ウィズペット病棟」を海津市医師会病院（同市海津町福江）に開設する。コロナ禍以降のペットブームで犬や猫の飼い主が増える中、ペットを自宅に残して入院することに抵抗感がある患者も多く、早期入院や早期治療の障壁になっていた。動物と触れ合うことによるストレスや痛みの軽減効果も期待できるといい、ペットを同伴させることで疾患の早期治療、回復につなげる。同法人によると、ペット同伴病棟は国内初。

（安井真由子）

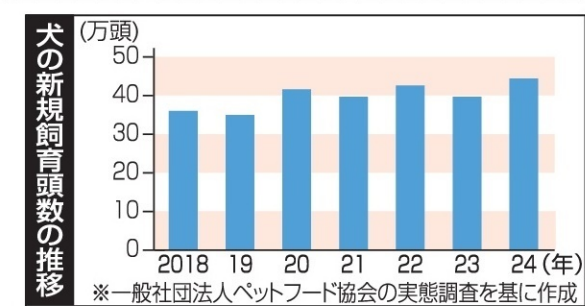
海津の病院に来月開設



日本初のペット同伴病棟を開設する海津市医師会病院。病棟横にドッグラン建設を予定している＝昨年12月、同市海津町福江（松波総合病院提供）

病棟は、現在使用していない海津市医師会病院の3階に開設し、来年夏までに40床まで増やす計画。個室にベッドと犬用ケージを置き、屋外にはドッグランを開設する。犬は予防接種を受け、健康に問題のないことなどが条件。犬の出入りは非常口を使って患者と導線を分け、衛生面に配慮する。

入院の対象は脳梗塞や胃がんなどの計画的治療を受ける患者。手術は松波総合病院で行い、術後数日で犬と一緒に医師会病院へ移る。患者が松波総合病院で入院している間は敷地内に新設する「ペットおあずかりセンター」で預かり、患者は医師からの許可があれば面会できる。退院後は希望者にペットと同居できる福祉施設を紹介するほか、1人暮らしの患者が亡くなった場合のペットの行き先についても保護団体と協議を進めている。



一般社団法人ペットフード協会（東京都）が毎年実施している全国犬猫飼育実態調査によると、2024年に新たに飼われた犬は44万頭となり、過去10年間で最多となっている。コロナ禍でペットに癒やしを求めたり、家庭での時間を充実させようとする傾向が見られ、増減はあるものの20年以降はコロナ禍前と比べて高い水準で推移している。

老年医学が専門で、ペット飼育がもたらす健康効果などを調査している国立環境研究所の谷口優主任研究員は「ペット同伴病棟について、生涯安心してペットと暮らすための環境がまだ

院や介護施設でセラピードッグが導入されている。松波理事長は「動物が患者に与える良い影響は広く知られながらも、衛生面などにハードルがあった。ペットと入院できれば、患者は安心して治療やリハビリに専念できる」と話した。同法人と医師会病院などは昨年4月、連携推進法人「美濃国地域医療リソーシング」を設立。自治体の枠を超えた地域医療体制の構築などに取り組んでいる。

高まるペットの癒やし

専門家、健康効果も指摘

まだ整っていない日本では、かなり踏み込んだ事例だ」と評価する。

谷口研究員らによる研究では、犬を飼って散歩などの運動習慣がある人は、犬

を飼っていない人に比べて認知症発症リスクが4割下がることが分かっている。オーストラリアなど、政府の在宅介護支援制度にペットケア費用が含まれる国もあるという。谷口研究員は「国内でも理解が深まり、同様の取り組みが広がっていけば」と話した。